広島横川の水辺における都市形成に関する研究

Study on urban development focusing on waterfront in Hiroshima Yokogawa

熊本大学工学部社会環境工学科　　中村　康佑

１．はじめに

水の都，広島ではよりよい水辺空間の利用を考える中で雁木の保全・活用が考えられている．本研究では，横川と楠木の大雁木を対象に水辺の都市形成の実態を歴史・地理的側面から整理する．そのうえで都市における雁木の位置づけを分析することを目的とする．研究対象地は広島市西部に位置する横川町周辺と楠木の大雁木とした．歴史的背景から横川を含む周辺地域を横川と呼ぶこととした．

２．既往研究の整理

雁木の研究は希少である．既往研究の指摘から「都市と構造物が有機的に関連しあって形成された空間」を得た．本研究では横川の都市形成と楠木の大雁木の関係にについて分析を行った．

３．横川における水辺の歴史

江戸時代から昭和初期について治水，舟運，鉄道の３点から水辺の歴史を整理したところ時代ごとの特徴がわかった．そこで時代ごとに横川の水辺の歴史を示す．

１）江戸～明治初期：横川が貯木場として利用されるなど物資集散地として機能し始めた．

２）明治後期：山陽鉄道や可部線が敷設により陸運が発達し，横川が近代化していった．

３）大正～昭和初期：鉄道が舟運にかわり，舟運が衰退した．太田川放水路による本格的な治水対策が始まった．

また，文献資料から楠木の大雁木は水・陸の結節点の役割を期待してつくられたことがわかった。

４．横川の地理的特性に関する分析

横川の地理的特性を分析した．横川を含む三篠地区は太田川放水路が整備されるまで水害に悩まされ，輪中堤を築いていた．また舟運，鉄道に着目して横川の位置づけを分析したところ，横川は街道沿いに広がるまちで近くを流れる本川の川幅も広く舟での利用もしやすかったと考えられる．このことから鉄道と舟運の両者から利用しやすい場所だったと考えられる．

５．大雁木に着目した横川の空間分析

（１）横川の水辺における土地利用の変化（図１）

横川の土地利用は山陽鉄道，可部線が敷設された後から市街化が進んでいることがわかった．

（２）水辺の歴史における大雁木の位置づけ

楠木の大雁木は横川駅を広島の中心駅にしたいというビジョンのもとで，水陸の結節点となることを期待されてつくられたことがわかった．しかし実際は大雁木と横川駅から延長された支線との連携がうまくできないなど効率的に利用できていなかったことがわかった．しかし沿革誌には名勝として紹介されるなど横川の水辺を特徴づけるものであったと考えられる．

1898（明治 31）年　1925（大正 14）年　1950（昭和 25）年

図１　横川の土地利用の変化

（３）横川の都市形成の整理（図２）

水辺の歴史と横川の土地利用の変化から都市形成の変化点は明治後期であり，鉄道の敷設が影響していると考えられる．また楠木の大雁木の特徴である大きさは鉄道の敷設に起因し，地理的特性から横川につくられたと考えられ横川の水辺の特徴を示すと考えられる．

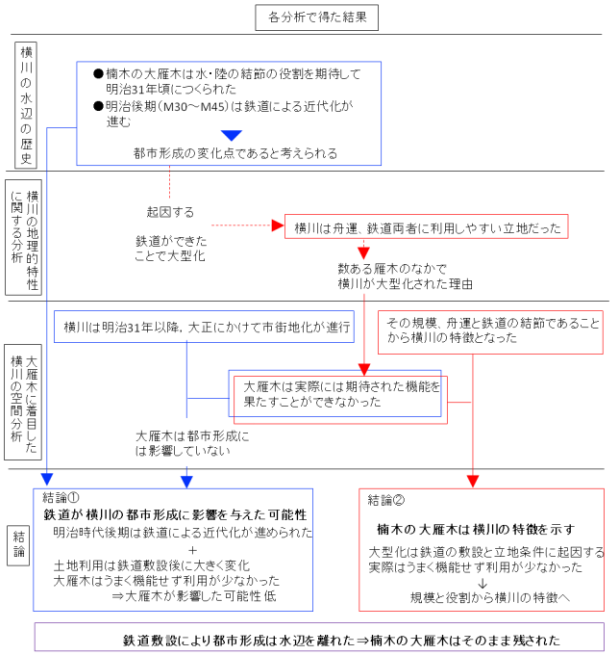

図２　各分析結果から結論までの流れ

６．おわりに

以下，研究の成果をまとめる．①横川の都市形成には鉄道敷設が大きな影響を与えた．明治30年を変化点として市街化を促進させ，駅と水辺を結びつける要因となった．②楠木の大雁木は鉄道が活発な時期に水陸の輸送をつなぐために築造されたが，鉄道の普及とともに舟運は衰退，都市形成も水辺から離れたことで，そのまま残存したと考えられる．